

域遺跡群詳細分布調査6

# 県下土器製塩遺跡の調査



深山遺跡遠景



深山遺跡検出磔群



大目津泊 I 遺跡遠景



大目津泊 I 遺跡製塩炉

## 序

昭和61年から平成3年まで国庫補助事業として、広域遺跡群詳細分布調査（生産遺跡）を実施してまいりました。その最終年度にあたり製塩遺跡を対象として調査を行ないました。

和歌山は海に面した美しい海岸美を誇る郷土です。いにしえより海岸の砂浜を利用して製塩が盛んに行なわれてきました。昭和36年に平城宮跡から発見された木簡にも「海部郡可太郷」から税として塩を収めたことが記されています。現在県下で百余りの製塩遺跡の存在が確認されていますが、その実態はほとんどわかっていません。これらの遺跡の規模・性格を把握することは文化財保護行政の措置を講ずるためにも必要なことであり、美しい和歌山の海岸美を守ることにもつながります。

このような観点から製塩遺跡の分布調査と発掘調査を行ないました。本書が今後の製塩研究のみならず文化財の普及・啓発に少しでもお役にたてれば幸いです。

平成4年3月31日

和歌山県教育委員会

教育長 西川 時千代

## 例 言

1. 本書は国庫補助事業平成3年度広域遺跡群詳細分布調査の成果である。
2. 発掘調査は財団法人和歌山県文化財センターが実施した。
3. 調査にあたっては、以下の諸氏、諸機関から有意義な助言あるいは協力を得た。記して謝意を表したい。  
巽三郎 山本賢 小賀直樹 大野左千夫 藤田憲司 前田敬彦 益田雅司  
中川貴 久保和士 小嶋護 山ノ内好一 矢倉甚兵衛 和歌山市教育委員会  
南部町教育委員会 串本町教育委員会 串本中学校(順不同 敬称略)
4. 本書の作成は富加見が行なった。

## 凡 例

1. 製塩土器の分類については『岬町遺跡群発掘調査概要』1978に準拠した。
2. 遺物は1/3(石製品を除く)を原則として統一している。
3. 遺物は遺跡毎に番号を付け、写真図版とも対応させている。

## 目 次

I 章 調査の経緯	P.L. 1 深山遺跡
II 章 地理的・歴史的環境	2 深山遺跡
III 章 調査の成果	3 大目津泊I遺跡
(1) 深山遺跡	4 大目津泊I遺跡
(2) 大目津泊I遺跡	5 大目津泊I遺跡
(3) 笠嶋遺跡	6 笠嶋遺跡・大水崎遺跡
(4) 大水崎遺跡	7 笠嶋遺跡・大水崎遺跡
IV 章 まとめ	8 笠嶋遺跡・大水崎遺跡

## 第I章 調査の経緯

和歌山県教育委員会では、昭和61年度から継続事業として広範囲に分布する遺跡群、あるいは二市町村以上にまたがる遺跡について、その位置を明確にするために部分的な試掘調査を取り入れた詳細分布調査を実施している。昭和61年度は岩橋千塚古墳群とその周辺の遺跡群について行なった。昭和62年度は和歌山県南部に分布する銅精練遺跡の詳細分布調査を実施した。昭和63年度は高野山関連遺跡として丹生都比売神社境内を調査した。昭和64年度は熊野三山に所在する経塚の分布・性格等を明らかにするため那智山で発掘調査を行ない、周辺地域も踏査による分布調査を実施した。平成2年度は古代窯業遺跡を対象とし、有田郡吉備町で分布

調査を行ない、14基の窯跡を確認し、このうち3基について部分的な試掘調査を実施した。平成3年度は、製塩遺跡について全県下を対象として和歌山市域では深山遺跡、日高郡域では大目津泊I遺跡、西牟婁郡域では笠嶋遺跡、大水崎遺跡の4遺跡の試掘調査を行なった。調査は、平成3年10月9日に始まり平成4年3月末日にすべて完了した。



第1図 遺跡位置図

## 第II章 地理的・歴史的環境

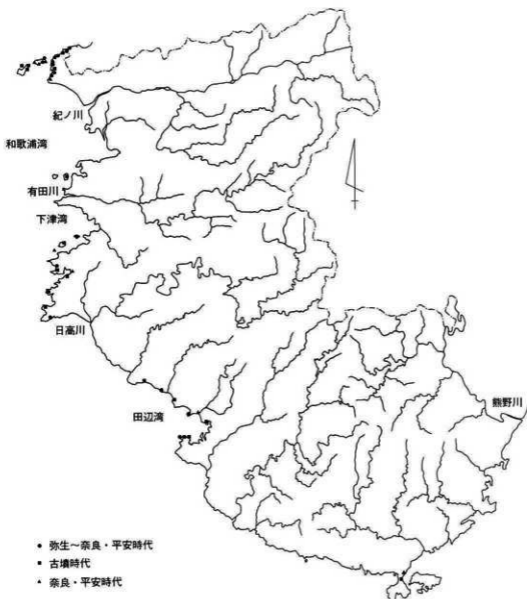
和歌山県は南北に長く、西を紀伊水道に面し、その中央部に面積の大半を占める紀伊山地が横たわる。したがって、わずかばかりの平野が海岸線に沿って認められるに過ぎず、遺跡の多くが海岸線に沿って分布するのもそのためである。このような地理的な条件にあって、海は人々の生活に少なからず影響を与えている。製塩もその一つで、重要な生業であったと考えられる。

西日本における土器製塩は、弥生中期に備讃瀬戸に始まり、やがて大阪湾沿岸や紀伊水道沿岸にもたらされたことが先学の研究成果によって明らかとなっている。紀伊水道沿岸の土器製塩は瀬戸内地方に次ぐ先進地域で、第2図に示すとおり加太周辺と田辺湾周辺、すなわち紀北・紀中が分布密度も高く、その発生も弥生時代後期に遡るものが多いようである。これらの遺跡は、奈良・平安時代にかけて存続し、その製塩技術も時代の移り変わりとともに進展していったことが知られている。

和歌山県下における製塩土器を出土する遺跡は、弥生～奈良・平安にかけて管見では98遺跡を数えることができ、そのなかで、製塩遺跡すなわち製塩を生業としたと考えられる遺跡は43遺跡を数える。その他は、集落、墳墓、祭祀関係の遺跡等から出土している。特に古墳時代に限れば、製塩遺跡が分布する周辺には古墳群が存在することが多く、中には古墳に製塩土器が供献されている例もある。在地首長と塩の関わりを示し、交易物資としての塩の利用価値の高さを量る重要な事象といえる。

さて、分布図から見ると紀北周辺では弥生時代後期に土器製塩が開始され、古墳時代にその盛期を迎えることが明らかであるが、やがて土器製塩にかわる新しい製塩法（鉄釜等）にとって替わられながらも、根強く奈良・平安時代まで連綿と続く遺跡が多いのも事実である。これに対し、紀南地域では古墳時代に製塩土器が出現する遺跡はあるものの、その分布も希薄で紀北地域を凌駕す

る程の土器製塩は行なわれていない。むしろ奈良・平安時代が中心と考えられる。これは畿内中樞からは遠隔地であったことも遠因であろうが、海岸近くまで急峻な地形で続く地形的な制約も大きかったと考えられる。ただ、海を媒介とした広い交易圏がすでにこのころには存在したのも事実であろう。



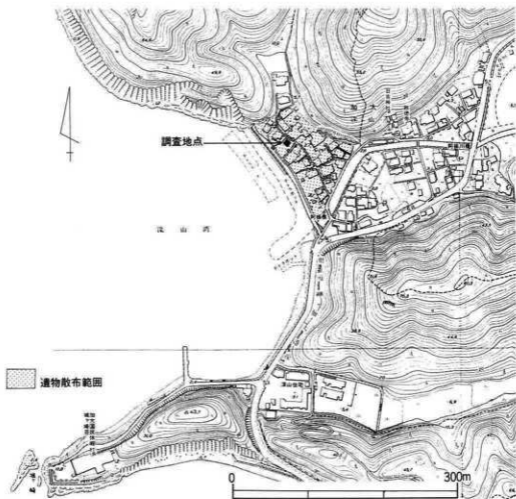
第2図 県下の製塩遺跡



### 第三章 調査の成果

#### (1) 深山遺跡 和歌山市深山所在

加太の瀬戸に面し、三方を山に囲まれた幅300m程の小さな浜で、前面には友ヶ島が広がり、その先には淡路島が遠望できる。岬からやや奥まっているため波は静かで砂浜を形成し、遺跡は現在の海水面から2.5m余り高い位置に立地している。これまで製塩土器が出土することは知られていたが、現在の集落と重なるため、その実態は確認されていなかった。



第3図 深山遺跡調査地点

調査は22m<sup>2</sup>であったが、2基以上の敷石炉を検出し、大きな成果を挙げることができた。層序は約30cmが客土で、その下層は製塩土器を含む茶褐色砂層となる。層厚は薄いところで10cm、厚いところで20cmある。この層には弥生～奈良時代にかけてのかなりの量の製塩土器が見られるが、遺構は存在しない。茶褐色砂層の下層は黒褐色砂層となり、この層中からは、調査区一面にわたって磔が検出された。

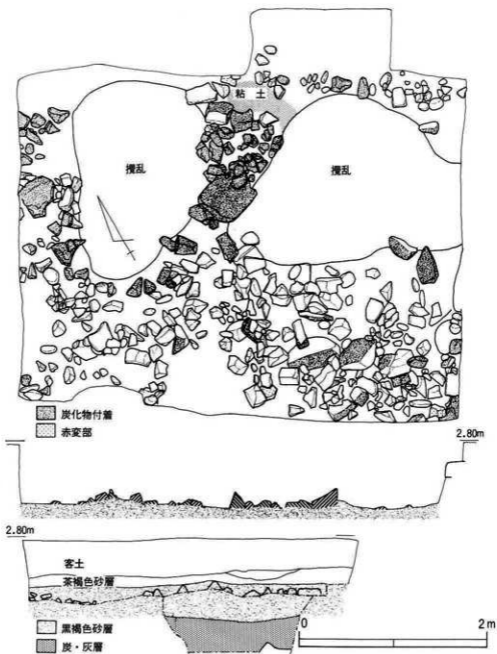
**遺構** 磔は40～50cm程度の大きなものから拳大のものまで認められ、多くの磔が二次焼成による変色や付着物が認められる。磔は扁平なものと角磔があり、それを見るかぎり法則性はないが、製塩炉としての蓋然性は高い。

さらに、磔群が途切れる北端は硬く踏み固められた状況を示していることから、炉跡周辺に見られるいわゆる「たたき面」を形成していると考えられる。

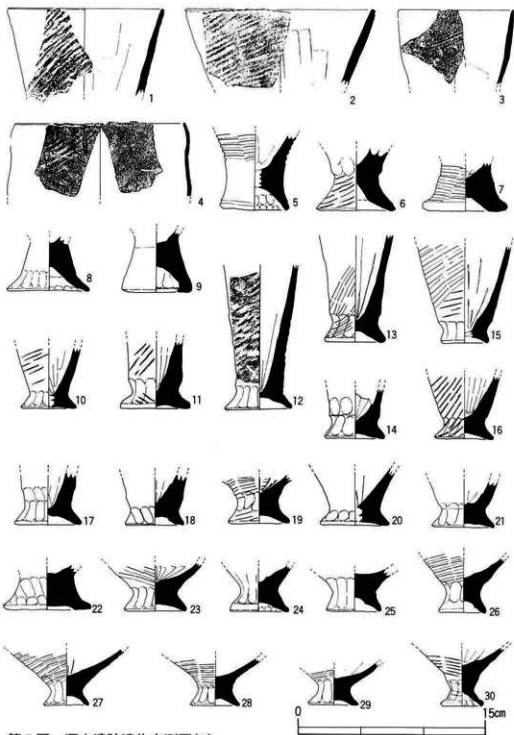
この磔群が何基の製塩炉からなるのかは判断できなかったが、なかには磔群に囲まれ粘土が貼られた小区画と見られるものや、磔群による小区画があり、これを製塩炉の一形態とみると、かなりの数が存在することが予想される。

**遺物** 脚台をもつもの、丸底のもの、棒状の底部を持つものが出土している。脚台は弥生時代後期と見られるⅠ式（5～9）と終末～古墳時代前期と見られるⅡ式（10～21）、古墳時代前期と見られるⅢ式（22～25）、中期と見られるⅣ式（26～30）がある。製作技法は共通して脚台（輪台）に粘土紐を巻き上げ逆フラスコ状の体部に仕上げている。後期の丸底Ⅰ式（31～35）は器壁が極めて薄く、せいぜい2mm程度で、内面は例外なく貝殻による条線で調整されている。奈良時代以降の製塩土器（37～44）は砲弾形を呈し、器壁も厚い。棒状の底部（45～48）は渥美半島や能登半島で多くみられる形態で、紀伊では初めて確認した。製塩土器はわずか22m<sup>2</sup>のなかに8657点出土している。その内訳は丸底が全体の52.4%と他を凌駕し、ついで脚台が45%、砲弾形が2.6%となっている。脚台についてみるとⅡ・Ⅲ式が全体の84.5%を占めている。製塩土器以外では土錘・浮標を初めとする漁労具、日常的な甕・壺・高杯等の土師器が

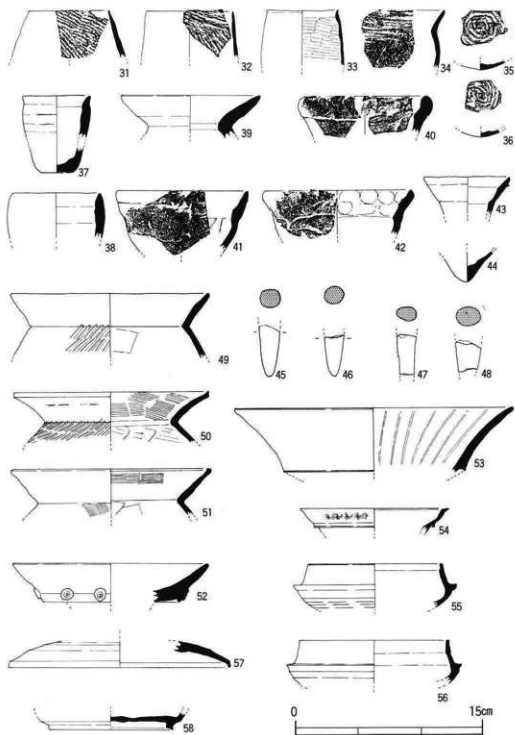
あり、その他に初期須恵器が出土している。自然遺物としては、魚骨、サザエなどの貝類、さらに獣骨も出土している。



第4図 深山遺跡全体図及び断面図



第5图 深山遺跡遺物実測図(1)



第6図 深山遺跡遺物実測図(2)

## (2) 大目津泊I遺跡 日高郡南部町山内大目津泊所在

東岩代川の河口から目津崎までは約1.2km続く千里浜があり、大目津泊I遺跡はこの目津崎の波静かな入江に面し、現在の汀線からは約30mばかり内側に入った位置に立地している。近くには熊野九十九王子社の一つである千里王子社も鎮座している。

**層序** 耕作土（I層）、客土（II層）、黒褐色砂層（III a, III b）、茶褐色粗砂層（IV層）からなる。このうちIII層・IV層が遺物含包層で、III層が古墳時代の土器が主体をなし、IV層は弥生～古墳時代前期の土器が主体をなす。

**遺構** 土壇6基と石敷製塩炉1基を検出した。土壇2基を除いては庄内～布留期にあたる。

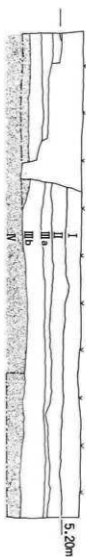
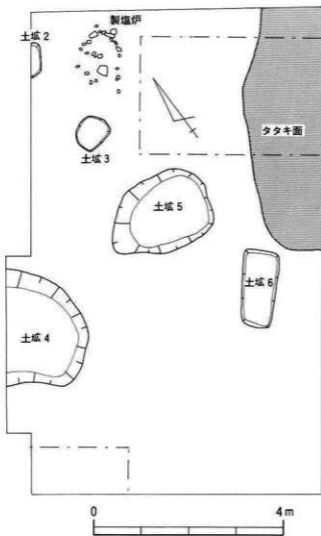
**土壇1** 土壇4と重複する土壇である。規模は径約0.5mで平面形は円形である。



第7図 大目津泊I遺跡調査地点



- I 耕作土
- II 客土
- IIIa 黑色砂層
- IIIb 黑色砂層
- IV 茶褐色粗砂層



第 8 図 大目津泊 I 遺跡全体図(1/80)

遺物は須恵器蓋杯（1・2）・土師器壺（3）・甕（図版PL. 5-51）が出土している。時期は古墳時代後期である。

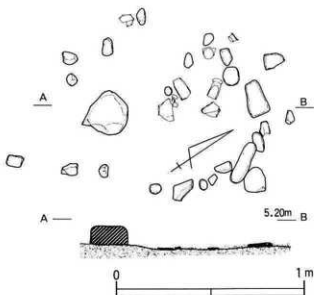
**土塚4** 2.5×1.7m以上の不整形形で、土塚1と重複する。埋土中には古式土師器の一群（1～13）が検出された。時期は古墳時代前期である。

**製塩炉** 6世紀以降に攪乱をうけたと見られるが1.5×1.0m程度の規模で検出した。人頭大から10cm程度の礫が、まばらな状態で構成されている。礫は二次焼成をうけたものが多く見受けられる。

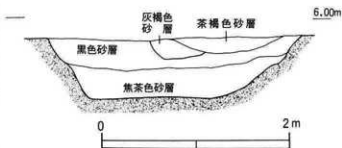
礫の間には脚台II式の製塩土器を中心として検出されており弥生～古墳時代前期の石敷の炉と考えられる。

**その他遺構** 丸底型式の土器堆積層を検出した。大部分が調査区外へ延びるため規模は不明であるが厚さは約30cmある。硬く踏み固められた状態で炉の周囲に形成される「たたき面」とみられる。時期は古墳時代後期である。

**遺物** 遺物は第III層・IV層から豊富に出土した。製塩土器は脚台I式（14）、II式（15～28）、III・IV式（29～37）、さらに甕形を呈する（38～40）がある。

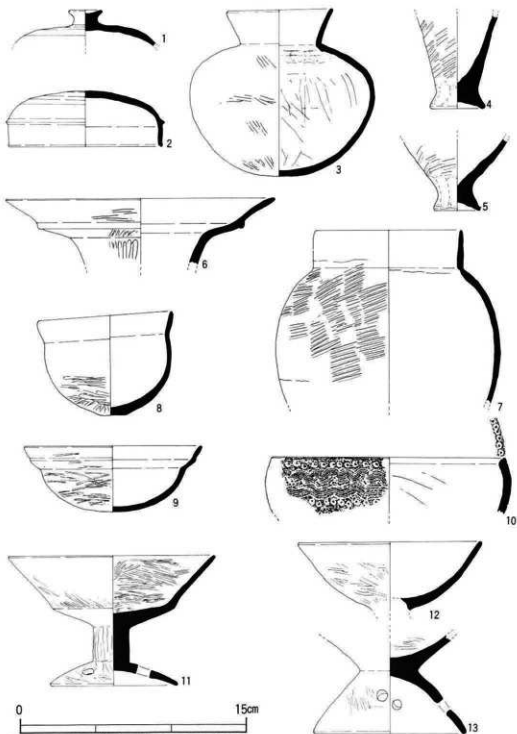


第9図 製塩炉

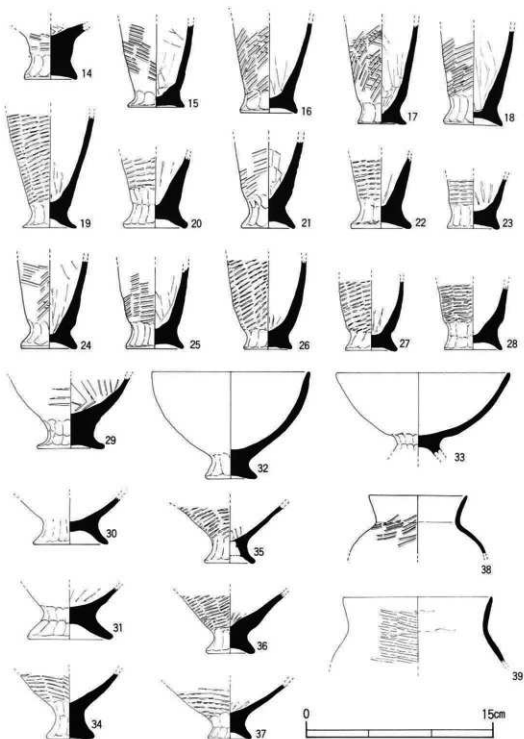


第10図 土塚4断面図



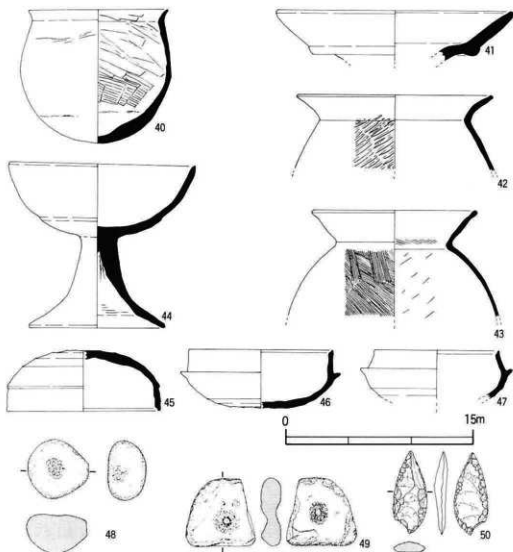


第11図 大目津泊I遺跡出土遺物(1)



第12図 大目津泊I遺跡出土遺物(2)

甕形は量的には一番多く、せいぜい2mm程度と薄く、細片が多い。II式もその出土量が多い。この時期が大目津泊では盛期と見ることができる。III・IV式で見られる鉢形(29~33)は転用の可能性もあるが、当遺跡の特徴を示すものと考えられる。日常的な土器も多く出土し、特に庄内~布留期の高杯類が多くみられ、祭祀的色彩が強く看取される。その他、須恵器蓋杯(45~47)、弥生時代の叩き石(48・49)、縄文時代前期のポイント(50)も出土している。



第13図 大目津泊I遺跡出土遺物(3) (下段石器は1/6)

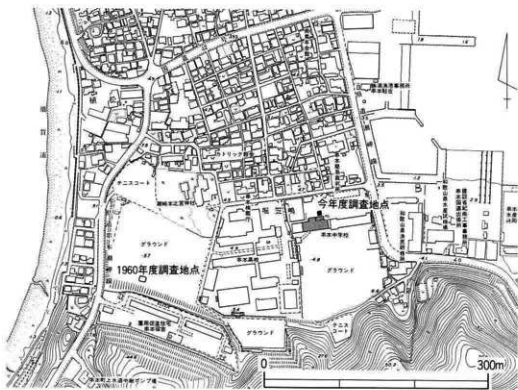
### (3) 笠嶋遺跡 西牟婁郡串本町笠嶋所在

笠嶋遺跡は本州最南端の串本町に所在する弥生時代後期から始まる海浜集落遺跡で、潮岬台地と紀伊半島をつなぐ砂州の上に立地している。

笠嶋遺跡は昭和のはじめに弥生土器が発見され、昭和35年に発掘調査が実施された。その結果、多量の土器群をはじめとして砥石、石錘・叩き石のほか、船材・船具・漁労具・漁網具・建築材・生活汁器類などといった木製品が多く出土し注目された。なかでも、高度な造船技術で造られた構造船の存在も想定されるにいたった。平成2年に再調査され、前回確認できなかった集落の一部を検出するとともに、古墳～奈良・平安時代の製塩土器も確認された。

今回の調査では製塩関係の遺構の検出に重点をおいた。

層序 約0.6mの客土があり、その下層は遺物を僅かに含む層厚10～15cmの灰色砂層（Ⅰ層）、更にその下層は古墳時代の土器を含む黑色砂層（Ⅱ層）があ

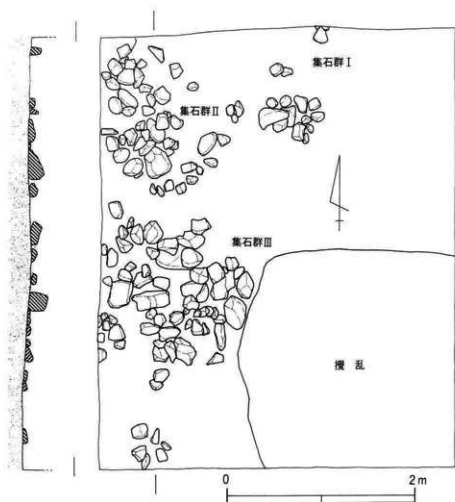


第14図 笠嶋遺跡調査地点

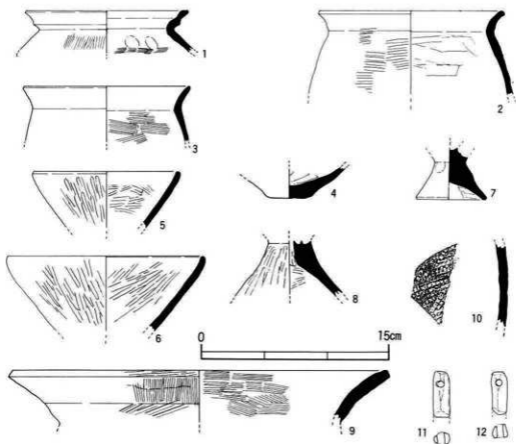
る。この黒色砂層を除去するとやや黄色をした粗砂（Ⅲ層）となる。粗砂の層厚は厚いところで約0.4mでその下層は人頭大の石で構成される礫層（Ⅳ層）となる。遺物はこのⅢ・Ⅳには含まれない。

**遺構** 円礫を利用した集石群を第Ⅳ層上面で3箇所で確認した。掘方の有無は精査を行なったが確認できなかった。

**集石群Ⅰ** 長軸0.7m、短軸0.5mの規模を持ち、10個前後の円礫で構成されている。集石の間からは東海系の「S字状口縁の甕」が出土している。



第15図 笠嶋遺跡遺構全体図



第16図 笠嶋遺跡出土遺物

**集石群Ⅱ** 長軸1.6m以上、1.2mの規模を持ち、石の積み方に規則性はなく無雑作であるが、平面的には長方形を意識し区画した集石である。集石の間からは壺の破片等が出土している。

**集石群Ⅲ** 長軸1.7m以上、短軸1.5mの規模を持ち、プランは集石群Ⅱに類似する。遺物は壺の破片が出土している。

**遺物** 東海系のS字口縁の甕（1）がある。壺（5・6）も伊勢湾地域に多く見られる土器で色調は褐色を呈し、丁寧にヘラミガキが施されている。須恵器は何片か出土しているが、（10）は甕で器面に格子タタキを施し、内面をすり消した須恵器である。おそらく地元産でなく他地域からの搬入品と考えられる。製塩土器は脚台Ⅰ式（7）が1点ながら出土している。

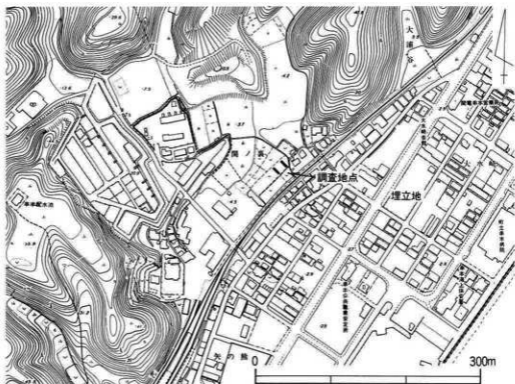
#### (4) 大水崎遺跡 西牟婁郡串本町大水崎所在

大水崎遺跡は和歌山を代表する縄文時代の海濱集落でもあるが、製塩土器に関しては、奈良・平安時代の砲弾形のもの最近知られるようになってきた。遺跡の標高は約4.5mを測り、現在は埋立等によって海から約300m内陸に入っているが、以前は海濱に面していたと考えられる。

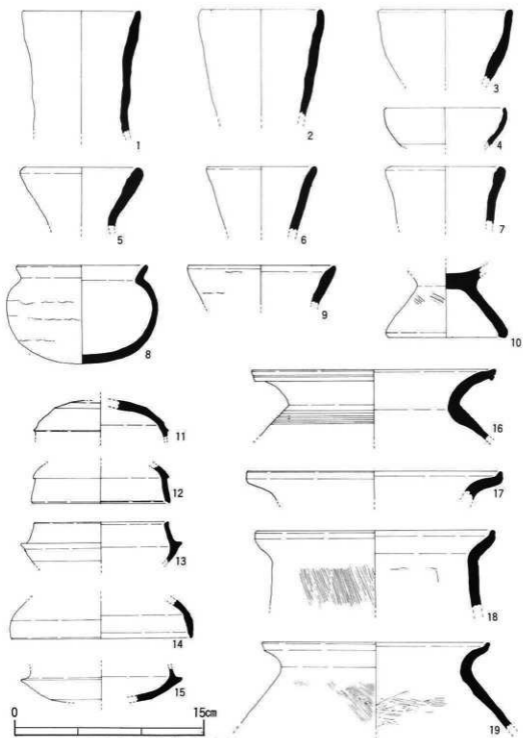
調査はトレンチを2箇所を設定し行なった。それぞれ、西から東に第1・第2トレンチとした。

**層序** 約30cmの耕作土があり、その下層は黒色砂層となる。層厚は約20cm弱である。この層には弥生～平安時代までの土器が混在した状況で認められる。黒色砂層は礫混じりの粗砂となり遺物は包含しない。

**遺構** 第1・第2トレンチで礫群が検出された。礫は第1トレンチの場合、散逸的であるが、第2トレンチの場合かなり集中的である。明らかに二次焼成を

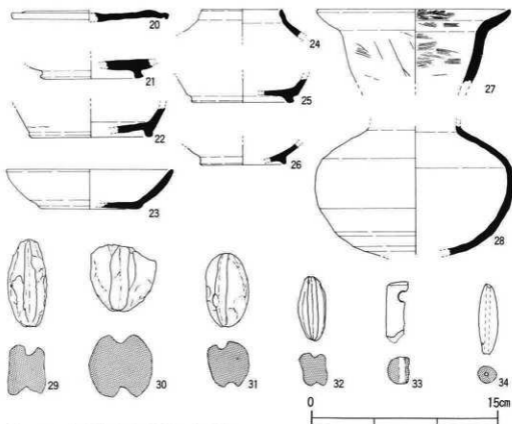


第17図 大水崎遺跡調査地点位置図



第18図 大水崎遺跡遺物実測図(1)





第19図 大水崎遺跡遺物実測図(2)

受けたと見られる礫も存在するが土器製塩に関連する遺構と断定しがたい。

**遺物** 古墳時代の遺物は台付甕の脚部(10)、須恵器はI型式～II型式のものが出土している。この時期の製塩土器は出土していない。出土する製塩土器は、すべて砲弾形(1～7・9)のもので、この製塩土器に伴なうと考えられる土師器には壺(8)・甕(17～19・27)があり、須恵器には蓋(20)・杯(21・22・25)・壺(28)がある。いずれも8世紀の所産と考えられる。したがって、製塩の開始はこの頃と考えられる。

一方、平安時代の須恵器杯(23)・黒色土器(26)もあり、土器製塩の行なわれた時期は奈良・平安を通してと幅をもたせて考えておきたい。土器以外では古墳～奈良・平安時代にかけての土錘(29～34)が出土している。

## 第Ⅳ章 まとめ

県下における製塩遺跡を調査して気付いた点を以下まとめてみる。

**深山遺跡** 石敷炉は一般には扁平な板石を敷き詰めたものが多いが深山遺跡の場合、無秩序に構築された炉であったと解釈している。その理由は多くの砂岩質の礫が二次加熱により変色し、青灰色の物質が付着している礫が多いこと。製塩土器が多く出土しているが、量的には薄手の丸底土器が多く、丸底の時期とすれば扁平な石より、角礫の方が安定しやすいこと。同じ紀伊水道に面した岬町小島東遺跡の製塩炉と酷似すること。以上のことから、時期を古墳時代後期以降とすれば製塩炉の可能性は高いと考えられる。この製塩炉の下層には炭・灰を多量に含む別の礫群を確認しており、先行する炉跡が存在することが確実である。

**大目津泊Ⅰ遺跡** 炉はかなり破壊されており、旧状は保っていないが石敷製塩炉を検出した。時期は庄内～布留期と考えている。この遺跡から出土する遺物は製塩土器だけでなく、日常的、祭祀的な土器まで豊富にある。これらの土器のなかには畿内中樞からの搬入品と考えられるものも存在している。生活領域については今回は検出できず、将来の課題として残る。

**笠嶋遺跡** 前年の成果と合せて考えれば製塩土器については新知見が多い。これまで製塩土器の空白地帯であったが、脚台Ⅰ式が認められることから製塩の開始が弥生時代後期まで遡る可能性が高いことがあげられる。また、6世紀代とみられる瀬戸内系のⅢ類に相当する製塩土器、奈良時代以降と見られる志摩式製塩土器も確認されている。日常的な土器についても伊勢湾沿岸地域の土器が多く、海を媒介とした交流が盛んであったこともあらためて裏付けられた。

**大水崎遺跡** 奈良・平安時代の製塩土器が発見されているが、これまでのところそれより遡る製塩土器は見当たらず、当該期に土器製塩が始まったことを示唆すると考えられる。

今回の調査結果を製塩土器からみれば、初期において、土器そのものの胎土は非常に良好で、形態、手法からもおよそ共通する要素が抽出できる。このことは地域毎に土器製塩が自然発生的にはなく、ある程度管理された状況下で、一元的に広められたものと考えることができるのではない。それは、在地の共同体を統括する首長の政治的、経済的な基盤の一環として半専門的に体制を組織したからであろうと考えている。しかし、それは紀北・紀中ではいち早く製塩を生業とする半専門的な集団が構成されたであろうが、紀南では顕著ではなかったと考えられる。

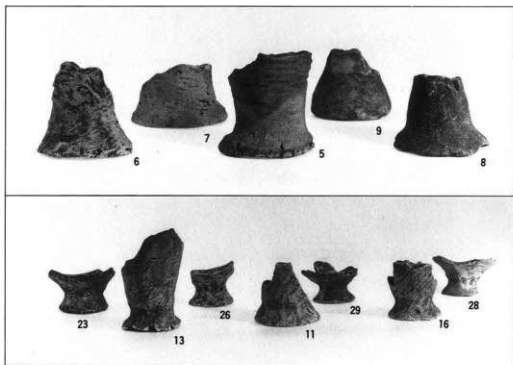
奈良・平安時代になると、古墳時代を凌駕するほどの土器製塩はどうも行なわれていない。しかし、平城宮、平安宮に塩を税として貢進していることが木簡等でも知ることができ、土器製塩にかわる新しい製塩法にとって変わられたと考えられる。けっして製塩そのものが衰退したとは考えられない。ただ、この時期、紀南では笠嶋遺跡、大水崎遺跡のように土器製塩を行っているところもあるが、それらは地域の交易圏を越えることはなかったと考えられる。今後の資料の増加を待っての検討課題としたい。

#### 参考文献

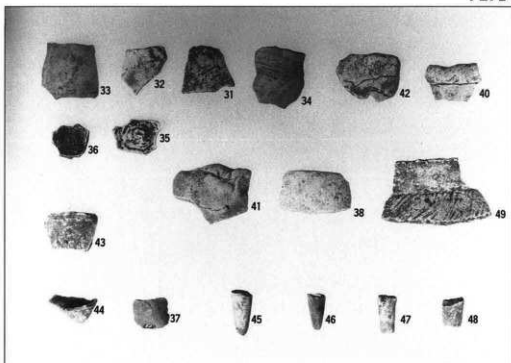
- 広瀬和雄「小島東遺跡」『岬町遺跡群発掘調査概要』大阪府教育委員会 1978  
近藤義郎『日本塩業大系』資料編考古1980  
〃 『土器製塩の研究』1984  
森浩一・白石哲夫『紀淡・鳴門海峡地帯における考古学』同志社大学文学部考古学調査報告第2冊 1968  
小川正純『山田海岸遺跡』大阪府埋蔵文化財協会1989  
巽三郎『大目津泊遺跡調査報告書』南部町教育委員会1966  
小賀直樹『大目津泊遺跡と製塩』『求真能道』巽三郎先生古稀記念論集1988  
安井良三『南紀串本笠嶋遺跡発掘調査報告』笠嶋遺跡報告書刊行会1969  
辻林浩・黒石哲夫『笠嶋遺跡』和歌山県文化財センター1991  
近藤義郎・岩本正二「塩の生産と流通」『日本考古学3』生産と流通1986  
石部正志「原始・古代の土器製塩」『日本技術の社会史』第2巻1985  
埋蔵文化財研究会『海の生産用具』資料集2 1986  
大山真充「製塩」『古墳時代の研究』4 生産と流通1991



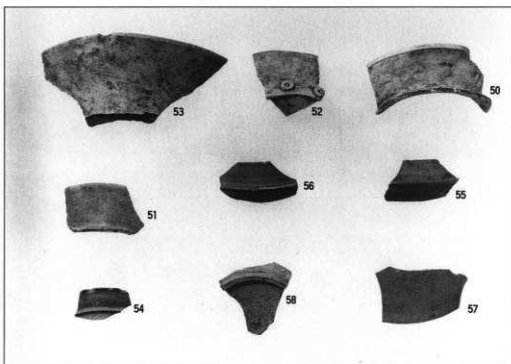
深山遺跡製塩炉（南から）



製塩土器(1) (上段脚台Ⅰ式、下段脚台Ⅱ式)



製塩土器(2)



製塩以外の土器



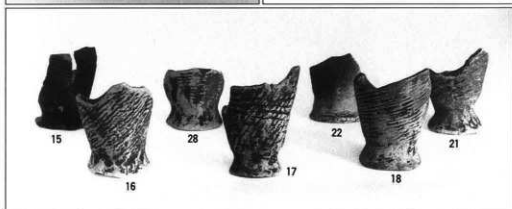
大目津泊 I 遺跡調査区全景（南西から）



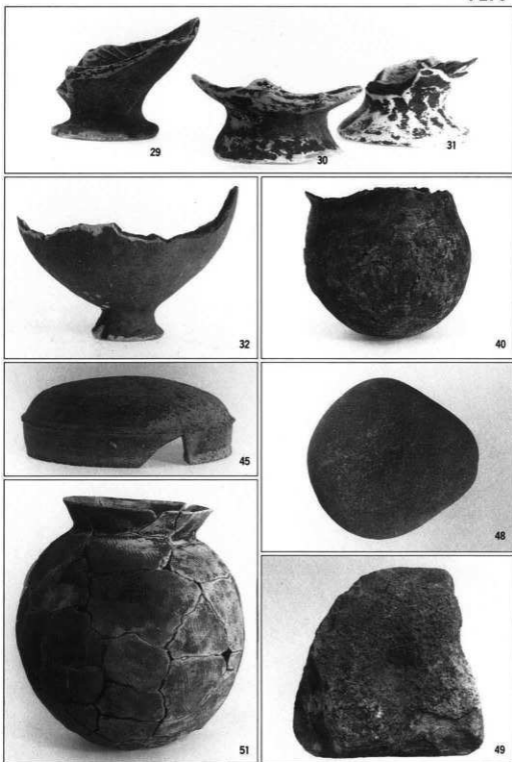
大目津泊 I 遺跡製塩炉（北東から）



大目津泊 I 遺跡土坑 4 (南東から)



大目津泊 I 遺跡出土遺物(1)



大目津泊 I 遺跡出土遺物(2)





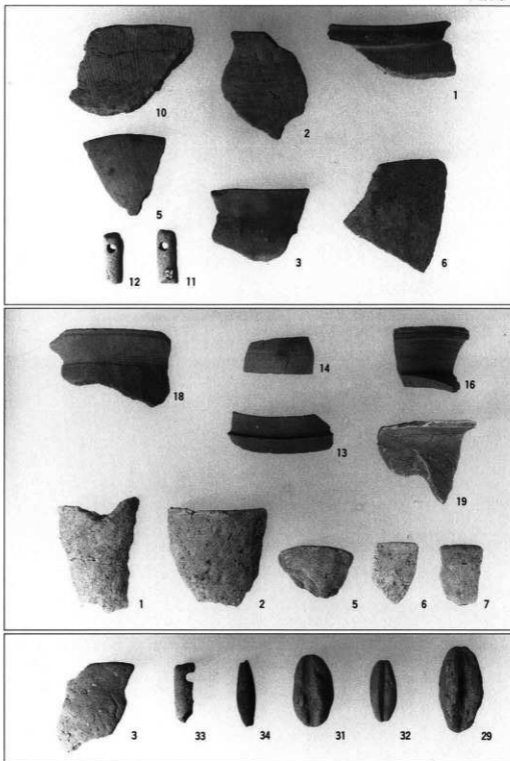
1. 笠嶋遺跡 2. 大水崎遺跡 (昭和41年撮影 S=2000)



笠嶋遺跡調査区全景（東から）



大水崎遺跡第2トレンチ全景（北西から）



上段 笠嶋遺跡出土遺物 中・下段 大水崎遺跡出土遺物

## 調査の組織

和歌山県教育委員会

文化財課長 北野 全美

副課長 堀代 喜蔵

〃 高橋 彬

文化技術班班長 吉田 宣夫

主任 藤井 保夫

主査 山本 高照

財団法人和歌山県文化財センター

事務局長 鍋島伊津夫

次長 菅原 正明

管理課長 松田 正昭

埋蔵文化財課長 辻林 浩

主査 富加見泰彦

平成4年3月31日 印刷・発行

### 県下土器製塩遺跡の調査

編集発行 和歌山県教育委員会

印刷 中央印刷株式会社